

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2025年3月1日 発行
(通巻 504 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 101

- ・「出航」公演無事終了しました (1)
- ・『出航』を終えて 八木澤賢 (2)
- ・「出航」不思議な感動のわけを探る 蔦谷栄一 (3)
- ・「出航」の稽古から 焼津漁港へ見学に 山中宏明 (4)
- ・出航サポーターズ 原子裕子 (5)
- ・「こがねいデジタル平和資料館」 陣内直行 (6)
- ・ハトノス『pica』再演・広島公演決定 青木文太郎 (7)
- ・計報・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町5丁目13番24号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

「出航」公演無事終了しました

昨年夏から稽古してきた「出航」公演は、2月1日から9日までの8ステージの公演を大盛況のうち
に終える事ができました。



カーテンコールの歌では、いただいた大漁旗が飾られました

NPO 現代座は1965年に「統一劇場」としてスタート、今年60年目になります。そこでずっとやりたいと思っていた「出航」を思い切ってやることにしました。

出演者が17人ですから、今までの現代座のメンバーだけでは出来ません。知り合いに声をかけようと話し合ったのは一年半以上も前です。きちんとした出演料が出るわけでも無く、稽古にも公演にも大変時間が取られるこの取り組みに参加してくれる俳優を見つけれられるか心配でした。しかし、個性豊かな俳優達が集まってくれました。

初演からずっと舞台上に立っている今村純二が松本市から駆けつけて現代座に泊まり込み、高齢にもかかわらず身体を張って「沖揚げ音頭」やテーマ曲「北の海へ」を指導しました。俳優達もその情熱に感応して必死に頑張りました。

セットも八木澤賢を中心に手作りし、全員で何度も転換の稽古をしました。

初日の開幕前にスタッフが捻挫で緞帳幕を引けなくなるといふアクシデントはありましたが、みんなの工夫で何とか乗り越えました。

公演はどの日も満席になりました。最後の3日間には「通路に座ってでも見たい」と言ってくれた方には、座布団をお渡しして座っていただくという、超満員の劇場になりました。全部で646人の方に観ていただくことができました。

幕が開くと色々なところで笑い声がおこり、拍手が入り、お客さんの心が動いているのが伝わってきて、役者を励ましてくれているようでした。

公演後たくさんの方が「良かった!」と声をかけてくださいました。改めて今の時代にこの芝居をやれて良かったと思えました。

本当にありがとうございました。

『出航』を終えて

演出 八木澤賢



約2年の準備期間を経て「出航」の公演がやっと終了した。いろいろなとぼんやりしていたのだが、このレポートで少し自分の考えをまとめてみたい。この公演における私の役割は「演出」というものなのだが、わかりやすく言えば、映画における「監督」みたいなものである。監督といえば、その作品に対して俯瞰し達観して様々な決定事項を裁いていく立場のように思えるが、私の場合は、人間の集団のなかで右往左往し、なんとか場を取り繕って平和な道を探り、その日その日を幸せに過ごせるかどうかの方策ばかり考えている、つまり、行き当たりばつたりの感が否めないのである。私の日常、劇づくりにおける仕事ぶりはだいたいこんな感じで、全くもって手探り、綱渡りの毎日を過ごしているのだ。私に限らずこんな日常を送る人は社会に溢れている。

「出航」では漁師の男たちが、いよいよ漁師を廃業するに直面した時、やっぱり俺は海の男だ、このままじゃ腐っちゃう、とあてのない漁へと出かけていく。彼らの帰りを待つ仲間や家族もまたその運命を受け入れるのだが、彼らにはなんの保証も見込みもない。いたい人間における「仕事」とはなんなのだろうか。この作品では生活の糧を得る「仕事」だけが描かれてはいない。出航した先に、成功した明るい未来を希望する反面、暗い現実を受け入れる、選択の覚悟を持つに至る人間の、「仕事」に対していく生き様が描かれて

いる。喜びや悲しみを含めて仲間と過ごす時間を通して、その「仕事」は人間にとつてなくてはならないものになり、かけがえないものとなる。

私にはそうした人間の生き様のシンプルな点に感動をおぼえ、再認識、発見した作品がこの「出航」であった。また初演が半世紀近く前の作品であり、昔の現代座を知る人々のなかには、「出航」は特別な思い出のままでありたい、今さら昭和の作品をなんでやるのか、という意見もあったが、公演を通して観に来てくれた方々と触れ合ううちに、やりがいや生きがい、物事に一歩踏み出す勇氣を持ちたい、と潜在的に願う声が多く聞こえた。昔も今も人間のありようは変わっていないのだ。作者の視点が時代を超えて共感を呼ぶところに「出航」の本質的な魅力があり、かつ、今、必要とされる公演であった。

いろいろな歪みの目立つように見える複雑な現代だが、仲間や社会と「仕事」を続けていこうと思う。

「出航」スタッフ

| | |
|------|------------|
| 制作 | 木下美智子・東志野香 |
| 写真撮影 | 山本幸則 |
| 動画撮影 | 桑原重美 |
| 小道具 | 本田典子 |
| 演出補 | 青木文太郎 |
| 舞台美術 | 八木澤賢 |
| 衣装 | 有島由生（斧頭会） |
| 音響 | 野中正行（響き工芸） |
| 照明 | 渋谷博史 |
| 演出 | 八木澤賢 |
| 音楽 | 岡田京子 |
| 作 | 木村快 |



3場 ポースン（甲板長）
と妻咲子



3場 漁師の辰と船頭の娘早苗



1場 食堂の娘みどりと漁師たち

「出航」 不思議な感動のわけを探る

農的社三デザイン研究所所長

現代座会員 蔦谷栄一



今回公演の『出航』を見てめったない感動を受けたことは間違いないが、それでは何故感動したのかを振り返ると、それが案外と難しいという不思議な感覚を味わっている。

漁師たちが「魚のとれなくなった、いわば展望のない海へ船出していく」のは何故なのか。公演に際して木村快さんがお書きになった『「出航」によって』なる一文では、「漁師にとっては辛いことだが、それでも彼らが「自分は海でしか生きられない」と思っていることに、私は救いを感じる。そこでしか生きられない人間だけが、自らを強くし、自然との共存の道を見出すだろう。」と記している。

芝居ではないが、以前「WOOD JOB!」なる映画を見た。大学を卒業しても就職を決められずにいる主人公は、繁華街で偶然、林業研修員制度のチラシを手にし、過疎地にある研修所に足を運ぶ。そして研修を修了してさらに山奥にある林業法人に見習的に就労する。本気でやるだけの覚悟もない中で、実地で諸々経験しながらもまさに滑ったり転んだりの毎日が続く。あるとき作業を終えて皆してトラックの荷台に乗って帰る時に、突然に作業員の一人が林業の作業唄である木遣り唄をうたいはじめる。徐々に歌は拡がって、森にこだまする。このときをつかいて主人公の作業に対する姿勢は大きく変わる。

「出航」もキーとなるのは歌であると見た。宝竜丸の元船長が歌いはじめると歌は少しずつ輪を広げ、櫓を叩きつけながらの歌となって高揚し漁師たちの心は一体と化する。そうしてそこに不思議にもかすかな希望が浮かび上がってきたのだ。ここを木村快さんは「人間は連帯することによってもっと強くなれる。そして自然と共存する道を見つけ出すだろう。わたしはそう思いたい。わたしにつながる仲間や、仲間の子供たちのために」と記している。逆境の中でも漁をして生き抜いていこうとする覚悟を歌が引き出し、連帯しようとする意思が拡がっていったのであろう。

そして実は舞台での歌の心は観客である私たちにも伝播し、観客も心と一緒に歌っていたのではないだろうか。木村快さんは別途「演劇の本当の素晴らしさは、この劇場における人生の共通体験にある」（『日本人と人間関係』143頁）と語っているが、まさに歌を通して舞台と観客が一体化し、漁師たちの覚悟を観客も引き受けたところに不思議な感動をおぼえたのではないか。あらためてこれが木村劇場論かと実感したのである。

アンケートから

・とてもエネルギーギッシュな動きと力強い歌に感動しつけられました。今の世の中、世界のうちこちでの争いや核兵器の不安、気象変動やAIなどのデジタル化の拡大などの不安が溢れている日々の生活の中で、こんな人間の力強い舞台を見たことは一瞬でも元気になれました。

いつもの現代座の帰りのように今日も元気いっぱい自転車をこいで帰りました。今日はいいい日でした。



4場 元船長の音頭で「沖揚げ音頭」を歌い、踊る漁師たち

・運動会で見ていたソーラン節ですが、これが本物！とても感動しました。

最後の出航も涙が止まりませんでした。

劇場が海！になっていました。また見たいです。

・本当に素晴らしい舞台をありがとうございました！役者の皆さん一人一人がびったりはまって、本当にそこに生きていらっしやるのが伝わりました。ありがとうございました。

「出航」の稽古から

稽古は昨年8月から始まりました。まずは歌の稽古や台本の読み合わせ。並行して芝居の背景の時代の動きや、漁業の仕事の内容を勉強します。本を読んだりビデオを見たり。でもそれだけでは足りない。どうしても漁港に行つて直接感じたい。

そこで12月7日、マイクロバスを借りて焼津漁港に行きました。焼津市観光協会の方に案内していただいて、資料館を見学し、係留されている漁船や船の修理をするドックを見て、やっとイメージが具体的にになりました。

そして稽古も追い込みに入った1月、マグロ漁から帰つて来た船の水揚げの見学が出来ることになったのです。全員では行かれないので漁師役の何人かが、みんなからの質問も持つて焼津に向かいました。



ヘルメットをお借りして船に乗り込む

焼津漁港へ見学に

漁師ダイちゃん役 山中宏明



1月10日(金) 漁師役のメンバー7人は、マグロ漁船の水揚げの現場を見学させていただける事になり静岡焼津市に向かいました。演出の八木澤さんの友人山城和磨さんが、焼津まぐろ漁業株式会社、常務取締役の立林雄祐様に頼んでくださったのです。

前の晩の稽古終了後から現代座に泊まり込み、朝3時に起床し、4時に出発。みんな興奮状態でとても会話が弾む車の中でした。

到着後、繋いでいただいた山城様と合流し、焼津まぐろ漁業株式会社、常務取締役の立林雄祐様にご挨拶。1年1ヶ月月漁に出ている第51福久丸の水揚げの様子を見せていただき、いろいろご説明をいただきました。

少し離れた場所で見える船から大量の冷凍されたマグロ、カジキがクレーンで引き上げられ、空を氷の結晶がキラキラと舞い、霜煙が上がっているのが見えました。とっても寒いの中にも関わらず、立ち上がる霜煙がマグロ、カジキをマイナス60℃で冷凍していたことがはっきりとわかる瞬間でした。

着地のたびにカチンカチンとなるマグロ、それを仕分ける漁師さん達の声、引きずる音、トラックに入る音、普段目にし、経験

しない私にはとても刺激的な現場を目の当たりにできました。

その後、船の甲板にご案内いただき、函館出身でサケ、マスを取っていらした漁師さんからもお話を聞かせていただきました。

こちらの質問に誠実に答えてくださる誠実さ、一言一言の説得力、とてもためになるお話をいっぱい聞かせていただきました。

船室には入れなかったのですが、はえ縄の幹縄の収納している場所、縄を巻く場所等、とっても丁寧に案内いただきました。

下船後、まだクレーンで水揚げされているマグロをととても近い場所で拝見させていただきました。

とても親身にご説明、ご案内いただき誠にありがとうございました。ありがとうございました。



出航サポーターズ

今回の公演では、公演に協力してくれる「出航サポーターズ」をつくりました。

映画「同胞（はらから）」上映をした「現代座会員の集い」に参加してくれた方や、「木村快とおのしゃべり会」に来てくれた方に呼びかけました。

「チラシを配るくらいなら」とか「受付の手伝いだけなら出来るかな」と、13人の方が集まってくれました。会の名前は「出航サポーターズ」と決めました。

話し合いの中で、公演終了後に誰でも参加出来る懇談会をやれないかという意見が出されました。「やろう」という事になりました。色々なアイデアはありましたが、結局、温かいほうじ茶を飲みながら気軽に話す場にする事になりました。

「たいしたことは出来ないけど」と言いながら、皆さんチラシを配ったり、ポスターを貼ったりして宣伝し、見に来てくれる人を誘ってくれました。そしてサポーター全員で70人もの人を集めてくれたのです。

そして公演の日には、玄関やホール内の案内をしたり、公演後には俳優とお客さんの懇親会のためにお茶を入れて準備したりと大活躍です。

サポーターズの力が無ければこの公演は成立しなかったと思いますし、いっしょに動く中で、少しでも互いが知り合い、話が出るようになったなら良かったなと思います。

人と人が関わり合うのが難しい時代の中で、俳優やスタッフだけが舞台を創るのでは無く、いっしょに「劇場を創る」仲間を広げていきたいな、と思っています。

(木下美智子)

『出航サポーター』として関わって

原子裕子

現代座とは、今まで、公演を観に行くという関わりでした。昨年の秋から木村快さんのおしゃべり会に参加する中で、次の公演、「出航」のサポーターになりませんかと誘われました。サポーターとは何をやるのか当初は分からず、舞台に端役で立つのかな、とか想像を膨らませていました。

木下さんに「稽古の見学にもいらしてくださいね」とにこやかに声を掛けられ、二度見学させていただきました。一つの場面を役者さん達が繰り返し演じ、立ち位置や動線、小道具の扱いなどを確認していました。時には、演出の方が「今の台詞の文末、上げるのではなく下げて。」とか細かい指示を出され、それに合わせて役者さんが言い方や動作を微調整するのが印象的でした。役者さんは、幾つも引き出しがあるらしく、一つの台詞を一回ごとに違う感じで言ってみたり、それに相応しい動きを付け加えたりしていて、「プロだなあ」と感心しました。稽古は、緊張感がありつつも台詞の言い間違いに茶々を入れたりする和やかな雰囲気、チームワークの良さが感じられました。

公演当日は、受付前のお客様の誘導やスリッパの提供などに当たりました。予約をせず来られた観客の方も通路席にお通しできるよう、スタッフ達は知恵を絞って動き回っていました。今まではこのような苦労を知らずにいました。

公演が終わると、2階の喫茶コーナーでのお茶出しを手伝いました。遠方から息子さんの舞台を見に来られた方や名古屋の劇団の方、役者陣はベテランから初出演の方まで、皆で車座に座り、熱いほうじ茶を飲み

ながらお話ししました。観客の皆さんは、公演の興奮冷めやらぬ感じで熱い感想を述べていました。公演は、圧倒的な力で迫ってきました！もともと多くの方、若い方々にも是非、現代座の芝居を体験してほしいです。今回、サポーターとして今までと違う形で現代座に触れさせていただきました。これからも何かの形で関わられたら大変幸せです。そして公演に協力しようと思った人達が顔を合わせて語り合い、お互いを知り合っただけでつながりを広めていくことは、とても大事な事なのではないかと改めて思いました。



12月の「現代座レポート」発送作業を手伝ってくださったサポーターの皆さん。右端が原子裕子さん

「こがねいデジタル平和資料館」

木村快さんの戦争体験収録、

「手記」の朗読協力

ありがとうございました

陣内直行

(小金井平和の日・市民イベント実行委員会)

まだ世間はお正月である1月3日、ビデオカメラが現代座にお邪魔しました。

「こがねいデジタル平和資料館」の戦争体験の収録のためです。

「こがねいデジタル平和資料館」ってなあにと思われるでしょう。

今年は、80年前の東京大空襲があつた3月10日を「金井平和の日」と制定してから10周年になります。そこで、私たちは、戦争体験者の証言や手記、市内の戦争遺産などを記録し、ホームページ上に「こがねいデジタル平和資料館」を立ち上げ、公開していくプロジェクトを企画しました。

戦後80年、戦争体験者の証言を記録することは、たいへん難しくなっています。当時の記憶がお話しただけの方は90歳代です。戦争体験を語り継ぎ、いのちと平和の大切さを未来につないでいくため、昨年からのプロジェクトは動き出しました。小金井市の「令和6年度提案型協働事業」に応募し、採用されました。このことも後押しになりましたが、私たちもチラシを作り、証言者や手記、当時の戦争関連の資料、写真などを募りました。市も市報で発信しました。また、市からの補助金では十分ではないので、寄付あつめにも奔走しています。

さて1月3日の現代座ですが、「出航」の稽古が続く中、正月の貴重な一日を収録のためにさいていただきました。本当に感謝いたします。この日は、代表の木村快さんから、朝鮮時代の話から、日本への引揚げ、原爆投下された広島での体験などのお話を収録。また、小金井市の方が書き残された戦争体験の手記を、木下美智子さん、長谷川葉月さん、黒澤義之さんに朗読いただきました。感謝です。

現在、戦争体験者の収録は市内在住の方9人にお話を伺いました。広島で被爆され家族を失った方、沖縄での空襲体験者、小金井で生まれ、子ども時代に戦争を体験された方。99歳の女性は、治安維持法制定の翌年に生まれ、「右を向いても左を向いても自由がなかった」と語ってくれました。小金井在住の作家・黒井千次さんの体験も聞くことができました。

手記の朗読は現代座の長谷川葉月さんの朗読サークル「武蔵野朗読会」の方にも協力をいただくことができました。

「こがねいデジタル平和資料館」は、証言者の方はもちろん、手記の提供者、NPO現代座をはじめ市内の団体からの協力をいただき、3月15日「こがねいデジタル平和資料館」完成発表会に向け、いま急ピッチで作業を進めています。同時にネット上にオープンします。ぜひご覧ください。
https://heiva-koganei.jp/

◆こがねいデジタル平和資料館オープン記念
ムービーカフェで平和を語ろう

戦争体験証言を視聴しながら、平和を語り合います。
3月30日(日) 12:30～14:30 @市民会館萌え木ホール(商工会館3階/小金井市前原町3-33-25) 500円(お茶菓子付き)



収録を終えて記念撮影 前列 長谷川葉月・木下美智子
後列 陣内直行さん・黒澤義之・内田雄二さん



陣内直行さん(右)のインタビューを受け、
緊張しながら戦争中の体験を語る木村快(左)

ハトノス『Pica』

再演・広島公演決定

青木文太郎

2024年6月に現代座会館上演したハトノス『Pica』について、2025年夏に現代座にて再演・加えて広島での上演が決定しました。

『Pica』は、「黒い雨の記憶」を中心に、それを語る人、語らない人、語れない人たちのそれぞれの歩みと葛藤を描いた群像劇です。実際に行われた広島「黒い雨」訴訟をベースとしながら、黒い雨の体験者だけでなく、現代の「原爆」を知らない世代が黒い雨と向き合う姿も描いており、昨年の上演の際にはありがたいことに幅広い世代の方たちから好評の声をいただきました。

ハトノスはこれまで「広島」という地の記憶を題材とした演劇を作ってきましたが、私も、出演者やスタッフも皆東京やその近辺に住んでいること、そして何より東京という地で「広島―原爆」に触れることに価値を感じていたことなどあって、「広島公演」というものは全く検討してきませんでした。それでも昨年の上演を経て、公演関係者やお客さん、広島にいる方々など様々な人たちからの応援の声をいただき、団体として初めて東京を離れ、広島での公演を実施することを決めました。

上演を前に、2月末に広島に行き、「黒い雨訴訟」の原告や支援する会の方たちに広島公演の実施をご報

告しました。私が想定している以上に、公演の実施を歓迎してくださり、身の引き締まる思いです。

広島にいる方たちのお話を通して、改めて「黒い雨」というものは、広島という地においても「忘れ去られよう」としていた事象「だったのだな」ということを痛感し、だからこそその記憶を繋いできた人たちの力強さを再確認しました。この作品には、そんな力強い想いが宿っていると私は信じています。

ハトノスは、2019年3月の旗揚げ公演以来現代座という場所で育ってきました。今回も広島公演の前に、現代座での再演も実施します。

現代座で学び、感じたことを胸に、広島公演に乗り出しますので、ぜひとも温かく見守っていただけると嬉しいです。



ハトノス『Pica』舞台写真（撮影：古元道広）

【公演情報】

ハトノス『Pica』

脚本・演出○青木 文太郎

<出演>

和田 響き、山中 宏明、経塚 祐弘、木の下 敬志、林 揚羽、宮本 和佳、鈴木 千夏、小黒 こまち、中本 修司

<演奏>

齋藤 ちゃくら

◆東京公演

2025年6月19日(木)～22日(日)

会場：現代座会館 地下ホール

◆広島公演

2025年7月11日(金)～12日(土)

会場：アステールプラザ 多目的スタジオ

【連絡先】 hatonosu86@gmail.com

【HP】 <https://www.hatonosu86.com/>

ハトノスHP



訃報



岡田京子さんのパートナーであり、いくつもの統一劇場・現代座の舞台音楽を創ってくださった安達元彦さんが、2024年12月3日に亡くなりました。84歳でした。永年共に歩んでくださった安達元彦さんのご冥福をお祈りいたします。

今村純二が2023年に作ったCD「時代とともに生きた歌」の頒価を、1人になった岡田さんを応援する支援金を含めて2500円に改めさせていただきます。よろしくお祈りいたします。

現代座会館 12月～2月 活動日誌

12月11日 「現代座レポート100号」発送作業

「木村快との雑談会」

1月15日 「木村快との雑談会」

2月13日 「木村快との雑談会」

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

12月～1月30日 現代座「出航」稽古

2月1～9日 現代座「出航」公演

2月13～16日 劇団「ヨセアツメカラ」公演

21～23日 東京工学院専門学校卒業公演

【三階小ホール】

12月14日 津田コンサート

15日 劇団マツチ箱公演

1月3日 デジタル平和資料館・朗読撮影

8日 リトル銀河「双子の星」稽古

20日 小金井女声合唱団

2月4、5日 リトル銀河「双子の星」稽古

24日 小金井女声合唱団

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

【二階会議室】

1月11日 緑町第2町会役員会

毎水曜日 熟年会

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円
 協賛会員 10,000円（1口以上）
 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座